世界文学全集 3

五経・論語

世界文学全集

3

五経
論語

世界文学全集 3

五経(易・書・詩・礼・春秋)
論語

昭和45年9月5日第1刷発行

編　者	吉川幸次郎 福永光司
発行者	竹之内静雄
発行所	筑摩書房 東京・神田小川町2の8 電話東京291-7651(代表) 郵便番号　101—91 振替東京　4123
本文紙	本州製紙株式会社
クロス	東洋クロス株式会社
本文印刷	多田印刷株式会社
製　本	株式会社鈴木製本所

(分類)0310(製品)20203(出版社)4604

目次

吉川幸次郎・福永光司編

五経

易　福永光司訳　5
書経　小南一郎訳　中島長文訳　75
詩経国風　中島みどり訳　131
儀礼　橋本循訳　201
礼記　小南一郎訳　257
春秋左氏伝　荒井健訳　319
春秋公羊伝　興膳宏訳　375
日原利国訳

論語　倉石武四郎訳　433
解説　吉川幸次郎　531
年表　545
世系表　548
詳細目次　550
参考地図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五

経

易

(一) 易は乾☰、坤☷、震☳、巽☴、坎☵、離☲、艮☶、兌☱の八卦を二つずつ上下に組み合せてできた六十四卦（別表）と、六十四卦を構成する三百八十四爻――陰陽の二原理を象徴する一と一を爻といい、三百八十四は一卦を構成する六爻に六十四を乗じた数――とによって、宇宙人生のあらゆる事象を象徴的にあらわし、これによって人間のさまざまな境位における行動の規準を占い知ろうとするものである。その哲学と占いの理論については繫辞伝・説卦伝などに詳細な記述が見えているが、要するに自然哲学と実践哲学とを根源的に一体化しようとするところにその大きな特徴があり、宋明の儒教をはじめ、広く中国人の哲学的思考は、この易から出発し、易にまた帰ってゆくといっても過言ではない。

[六十四卦]

*(1)乾☰　*(2)坤☷　(3)屯☳　*(4)蒙☶
(5)需☵　(6)訟☰　(7)師☷　(8)比☷
(9)小畜☴　*(10)履☱　*(11)泰☷　*(12)否☰
(13)同人☲　(14)大有☰　*(15)謙☷　*(16)豫☳
(17)随☱　(18)蠱☶　*(19)臨☷　*(20)観☴
(21)噬嗑☲　(22)賁☶　*(23)剝☶　*(24)復☷
(25)无妄☰　(26)大畜☶　(27)頤☶　*(28)大過☱
(29)坎☵　(30)離☲　*(31)咸☱　*(32)恒☳　*(33)遯☰　*(34)大壮☳
(35)晋☷　(36)明夷☲　(37)家人☴　(38)睽☲
(39)蹇☵　(40)解☳　*(41)損☱　*(42)益☳
*(43)夬☱　*(44)姤☰　(45)萃☷　*(46)升☷
*(47)困☱　(48)井☵　*(49)革☲　(50)鼎☲
(51)震☳　(52)艮☶　(53)漸☴　(54)帰妹☳
(55)豊☳　(56)旅☲　*(57)巽☴　(58)兌☱
(59)渙☴　(60)節☱☵　*(61)中孚☴☱　(62)小過☳☶
(63)既済☵☲　(64)未済☲☵

(以上、上経)

(以上、下経)

＊は本書に訳文の載せられている卦を示す。

(二) 経典としての『易』は、「経」とよばれる本文の部分と「伝」とよばれる解説の部分とから成っている（一般には、この両者を合せて広く易経とよぶ）。経の部分はさらに上下の二篇に分たれて上経・下経とよばれ、解説の部分はさらに彖伝上下篇、象伝上下篇、繫辞伝上下篇、文言伝、説卦伝、序卦伝、雑卦伝の十篇に分たれて「十翼」とよばれる（「翼」は経典の内容を扶け解説する文章の意）。

(三) 上経・下経は、六十四卦と、六十四卦のそれぞれについて卦全体の意味を説明する卦辞「彖辞ともいう」、および卦を構成する六爻について一つずつその意味を説明する爻辞とから成る。

また、十翼のうち、象伝は上下経の卦辞すなわち彖辞を解説し、象伝はさらに「大象」と「小象」とに分たれて、大象は彖伝とは別の角度から卦の全体を解説し、小象は六つの爻辞の一つ一つを解説する。次に繫辞伝は上述のように易全体の哲学と

占いの理論についての解説。文言伝は六十四卦のなかで特に重要な乾坤の二卦のみを詳細に解説。説卦伝は、前半は八卦の象徴する事物事象について解説。序卦伝は六十四卦の配列の順序について、雑卦伝はその各卦の特徴について解説する。

ただし現行の易経テキストでは、十翼のうち、彖伝と象伝の大象とは、経文の各卦の卦辞のあとに分ち載せられ、象伝の小象は各卦の六つの爻辞のあとにそれぞれ分ち載せられている。また文言伝は乾坤二卦のおわりに分ち載せられ、その他の繫辞、説卦、序卦、雑卦の四伝は下経のあとにまとめて載せられている。

(四) 上経に収められている三十卦、下経に収められている三十四卦のそれぞれの卦についての記述は、したがって次のような順序体裁となっている。

(1) はじめに卦の名称をかかげ、その下に卦の象を示し、その下に卦を構成する下の三画の卦（下卦もしくは内卦とよぶ）と上の三画の卦（上卦もしくは外卦とよぶ）の名称を付記する。例。蒙䷃坎下艮上。履䷉兌下乾上。

(2) 次に卦辞の文章を載せる。

(3) 次に彖伝の文章を載せる。

(4) 次に象伝の大象の文章を載せる。

(5) 次に爻辞の文章と象伝の小象の文章とを六つの爻の下から順番に載せる。その場合、六つの爻は下から順番に「初」「二」「三」「四」「五」「上」とよばれ、陰爻 ⚋ は数の六、陽爻 ⚊ は数の九であらわされる（数の六と九であらわす理由については、繫辞伝の説明を参照）。したがって蒙䷃の卦であれば、六つの爻は下から「初六」「九二」「六三」「六四」「六五」「上九」とよばれ、履䷉の卦であれば、下から「初九」「九二」「六三」「九四」「九五」「上九」とよばれる（「初」と「上」の場合だけが、数字の上におかれて「初六」「上九」などとよばれる）。

坤から未済に至る六十三卦の記述は、いずれも以上のような順序体裁となっているが、ただ巻頭におかれた乾の一卦だけは、その重要性のために他と異なった順序体裁となっている。すなわち(1)の卦名・卦象の次にただちに爻辞だけが列挙せられ、次に彖伝が、次に象伝が大象と小象を併せて載せられている。また乾卦と坤卦のおわりにだけ文言伝の文章が加えられていることは上述のごとくである。

(五) 儒教の伝統的なドグマによれば、六十四卦の象を定めたのは、古代の伝説的な帝王伏羲であるとされ、卦辞は周の文王、爻辞は文王の子の周公、十翼は孔子の作であるとされる。

(六) 易の占いは五十本の蓍（筮竹）を用いて行なわれる（五十本を用いる理由については繫辞伝を参照）。五十本の蓍（筮竹）を操作して上下経の六十四卦・三百八十四爻の中から占者の求める卦と爻とを決定し、そこに載せられている卦辞・爻辞・彖伝・象伝の解説を味読して、おのれの現在おかれている境位と行動の基準――吉凶悔吝――を知るのが、易の占いの大要である。五十本の蓍（筮竹）の操作すなわち占筮法に関しては、繫辞伝の記述する本筮法のほか中筮法・略筮法・擲銭法（蓍のかわりに銭を用いるもの）などがあるが、六十四卦の全部を載せていない本書では、その詳細な説明を省略する。

(七) 本書に収めた『易』の訳文は、紙数の関係上、上下経の六十四卦は乾坤二卦を含む二十四卦に、十翼は繫辞伝と説卦伝の全文のみに止めた。しかし、これによって易の哲学の本質と

易経の構成・内容の大体は理解されるであろう。ここに選んだ二十四卦は、乾坤二卦を含む十二消息卦（乾・姤・遯・否・観・剝・坤・復・臨・泰・大壮・夬）と、繫辞伝にいわゆる九徳卦（履・謙・復・恒・損・益・困・井・巽。ただし復卦は両者に重複）、および中国人の思考の特徴を特に顕著に示すと考えられる蒙（教育の哲学）、咸（感応の哲学）、革（革命の哲学）、中孚（誠実の倫理）の四卦とである。二十四卦の排列は易上下経本来の順序に従った。

(八)　本書は易の哲学と易の哲学の中に集約された中国人の思考方法を理解することを主眼として編集された。したがって本書の読者には、まず繫辞伝と説卦伝の訳を、ついで乾坤以下の二十四卦の訳に読みすすまれることをおすすめする。

なお、本書の訳文の作製にあたっては、本田済氏の『易』（新訂中国古典選）に負うところが少なくない。記して謝意を表する。

上　経

乾　䷀　上下ともに乾。――能動の原理。四月の卦――

[卦辞]

占ってこの卦を得たものは、願いごと元いに亨る。身を貞しくたもつことを利しとする。(1)

[爻辞]

初九　地に潜む龍である。力を用いずに時節を待て。

九二　姿を現わして田の中にいる龍である。人々が在野の賢者に目をとめるチャンス。

九三　警戒を要する境遇である。(2) 有徳者たるものは一日じゅうせっせと勉め励み、夜になってもびくびくと戒慎する。かくてこそ人生の危機ではあるが咎を免れる。

九四　躍りあがることもあるが、なお深い淵の上にいる龍である。進退に慎重であれば咎を免れる。

九五　大空に飛翔する龍である。人々が聖王を仰ぎ見るチャンス。

上九　大空を昇りつめた龍は後悔する。腹八分目に病いなし。

用九(3)　群がる龍でありながら、よく見るとどの龍にも首がない（頭を隠している）。すぐれた才徳をそなえて人にひけらかさぬから吉である。

[象伝](4)

まことに広大無辺であるよ、乾の万物を生成する元いなるはたらきは。万物はこのはたらきに資づいて生れ出る。かくて乾は天の理法の一切を統べることができるのである。

この乾の元いなるはたらきは、やがて雲となって空を流れ、雨となって地に降りそそぎ、万物はそれによって形をととのえてゆく。これが乾の亨る、すなわちあまねくこの世界に流通してゆくはたらきである。

さて聖人がこのような乾のはたらきの終始を根源的に明らかにするとき、六爻の位がそのときそのときの宜しきに随って定立される。たとえば初爻の位は潜むべきときであり、二爻の位は現われるべきときであるというように……。かくて聖人は、よきときに随って六匹の龍（乾の六つの陽爻）に引かせた車に乗り、天の理法の世界を自由自在に駆けめぐるのであり、これが乾のはたらきと一体となった聖人の「元いに亨る」である。

ところで天の理法は一瞬も停らず刻々に変化するが、その変化に応じて万物がそれぞれに天から与えられた生命の本質を正しく実現し、自然の大いなる調和に持続的に合致すること、それが乾の「利貞――貞しくたもつことを利しとする」の意味である。この場合、乾のはたらきと一体となった聖人が、万物の上にぬきんでた王者の地位にあって指導するとき、彼の偉大な徳に感化されて世界じゅうの国

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国がすべて平和となるのである。

【象伝】

天の運行は健かで力強い。有徳者たるものは、この天にのっとって不断にみずから強めはげむのである。[6]

初九の爻辞に、「地に潜む龍である。力を用いずに時節を待て――潜龍、用うるなかれ」とあるのは、力をもつ陽爻でありながら最下の地位にいるからである。九二の爻辞に「姿を現わして田の中にいる龍――見龍、田に在り」とあるのは、これから徳の感化が普く世に及ぶという意味である。九三の爻辞の「一日じゅうせっせと勉め励む――終日、乾乾」というのは反復して道を践み行なうという意味である。九四の爻辞の「躍りあがることもあるが、なお深い淵の上にいる――或いは躍りて淵に在り」というのは時節が到来すれば前進しても咎を免れるという意味である。九五の爻辞の「大空に飛翔する龍――飛龍、天に在り」というのは、聖人だけにやってのけられることである。上九の爻辞の「昇りつめた龍は後悔する――亢龍、悔い有り」というのは、盈ちていっぱいになった状態は永続できないという意味である。用九の爻辞は、天徳すなわち乾の剛なるはたらきをもって出しゃばってはならぬということである。

文言伝の言葉[7]

「元亨利貞」の「元」は生命の大いなる根源であるから仁義礼智に当てれば仁であり、善の長――最高善である。「亨」はあまねく流通して万物を造形するはたらきであるから礼であり、嘉きものの会り――集団美である。「利」は万物みな宜しきにかなうことであるから義であり、義しさを貫きながら人との調和を得たものである。「貞」は万物の生成を全うし持続させるはたらきであるから智であり、事業の根幹となるものである。有徳者たるものは、仁を身につければ人の長となることができ、嘉きものを一堂に集めれば礼にかなうことができ、万物にそれぞれ利しきを得させれば、義しさを貫く人々を調和させることができ、智によって確固たる貞しさを持ちつづければ事業の根幹となって成果をあげることができる。有徳者とは、この四つの徳を実践する者のことである。だから「乾は元亨利貞」といってあるのである。

初九の爻辞に「潜龍、用うるなかれ」とあるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。龍のような偉大な徳をそなえながら世をしのんでいる人のことである。かれは世俗に迎合して節操を易えることなく、名声を博そうともしない。世間から遯れて隠者の生活をしていても心に悶えを抱かず、人から善しとされなくても平気である。有道の世を楽しく感ずれば出でて吾が道を行ない、無道の世を憂しめば、いさぎよく身を引く。このように確乎として奪うことのできない人生態度をもつ人間、それが「潜める龍」である。

九二の爻辞に「見龍、田に在り、大人を見るに利し」と

あるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。龍のような聖徳を身にそなえて正しく中庸を得た人のことである。かかる人物は日常の発言に嘘いつわりがなく、日々の行動に慎重であり、邪念の起るのを防いで誠実さをたもち、世間に対して善事を行なっても鼻にかけず、その徳は広大で人々に感化を与える。易に「見龍、田に在り、大人を見るに利し」とあるのは、君主たるにふさわしい聖徳を備えた人のことをいうのである。

九三の爻辞に「君子は終日乾乾、夕も惕若たり。厲うけれども咎なし」とあるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。有徳者たるものは徳を目ざして進み、業ないを修める。忠信すなわち自己と他人に誠実であることが徳を目ざして進むための具体的な手段であり、言辞をなおざりにせず心の誠を確立することが善き業ないをものにする実践方法である。至るべき最高の境地を知って、そこに至ろうと努力するものはともに道の機微を語るにたり、終るべき最後の時機をわきまえていさぎよく身を引くものは、ともに道の義しき在り方を保持してゆくにたる。だから彼は高い地位にいても驕らず、下位にいても悲しまないのである。かくて乾乾として勉め励み、そのときどきに応じて惕れつつしむから、危機に置かれても咎を免れるのである。

九四の爻辞に「或いは躍りて淵に在り、咎なし」とあるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。躍りあがったり淵に下りたりして行動が一定しないが、邪念があってのことではない。また前進したり後退したりして動作に一貫性がないが、社会から孤立して勝手なことをしようとするのではない。有徳者が徳を目ざして進み業ないを修めるのは、時節の到来にタイミングを合せようと思うからである。だから咎がないのである。

九五の爻辞に「飛龍、天に在り、大人を見るに利し」とあるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。音声が同じであれば共鳴作用をおこし、気の合ったもの同士は求めあう。水は湿り気のあるところに流れ、火は燥いたところに燃えうつる。雲は龍のいるところに立ちこめ、風は虎とともに吹きおこる。それと同じく聖人が世に現われれば万物がその徳を仰いでおのずから注目するのである。気を天から稟ける動物は天空に親しみを抱いて頭を上に向け、気を大地から稟ける植物は地下に親しみを抱いて根を下に向ける。してみると万物はそれぞれに類をもって集まるのである。

上九の爻辞に「亢龍、悔い有り」とあるのは、いかなる意味か。孔子は説明していう。上九の位は貴いが天子としての位は九五にあってここになく、位置は高いが治めるべき人民をもたず、賢人は下位にいながら輔けようとする者は誰もいない。だから行動しようとすれば後悔する結果になるのである。

乾の卦の爻辞は次のように解することもできる。

初九の「潜龍、用いるなかれ」というのは、最下の位だ

からである。九二の「見龍、田に在り」というのは、時世がまだ彼を用いないのである。九三の「終日乾々」というのは、おのれの徳行を練磨する仕事に励んでいるという意味である。九四の「或いは躍りて淵に在り」というのは、自己の可能性を試しているのである。九五の「飛龍、天に在り」というのは、上に立つ支配者となって民を治めるという意味であろう。上九の「亢龍、悔い有り」というのは、昇りつめたものの禍いをいう。乾の元いなるはたらきにおける用九の戒めは、このようにすれば天下が治まるというのである。

あるいはまた次のように解することもできる。

初九の「潛龍、用うるなかれ」というのは、陽気がまだ地下に潜み蔵れていることをいう。九二の「見龍、田に在り」というのは、世の中が文化の輝きをもつことをいう。九三の「終日乾々」というのは、時の危うさと歩みをともにして自己の充実に努めるという意味である。九四の「或いは躍りて淵に在り」というのは、ここで下卦から上卦にかわり、乾の在り方が今や変革するときであるから進退を慎重にするというのである。九五の「飛龍、天に在り」というのは、今や天徳ある者の位すなわち帝王の地位に就くことをいう。上九の「亢龍、悔い有り」というのは、時世の行きづまりとともにこの位にあるものも行きづまることをいう。乾の元いなるはたらきにおける用九の爻辞は、剛にしてしかも柔であれという天の法則をここで示したのである。

さて彖伝に「乾元」というのは、万物の始源としておのれ自身は無形でありながら形而下の世界にあまねく流通して万物を生成する霊妙なはたらきである。また「利貞」というのは乾の性情すなわち本質的なあり方である。乾の始めすなわち乾元は、すばらしい利益を天下の万物に与えながら、利益を与えた対象をこれと言揚げしない。まことにまことに広大無辺であるよ、乾のはたらきは。剛健であって中庸の正しさを得、純粋であって少しの雑り気もない。そのはたらきは六つの爻のそれぞれに発揮されて、くまなく乾の本質を明らかにする。だから彖伝にもいうように、聖人は「よきときに随って六龍に引かせた車に乗り、天の理法の世界を自由自在に駆けめぐる」のであり、「雲となって流れ雨となって降りそそぐ」乾の元いなるはたらきのように、その恵みがあまねく万物に及んで、世界の平和が実現するのである。

最後に実践倫理的な観点から六爻の爻辞を解釈してみよう。

いったい、有徳者たるものは完成された徳を行為の基準とする。完成された徳とは日々の生活の中に目のあたり具現された行為である。したがって、初九の「潛龍、用うるなかれ」の「潛」という言葉は、その行為が世に隠れてまだ目に見えるものとなっていず、行為してはいるが徳として未完成であることを意味する。だから有徳者たるものは、

それを世に用いようとはしないのである。

次に九二の爻辞について。有徳者たるものは学ぶことによって知識を集積し、問うことによって是非真偽を判断してゆき、余裕のある態度で身を処してゆき、仁愛の心で政治を行なってゆく。易の爻辞に「見龍、田に在り、大人を見るに利し」というのは、君主としての徳をそなえた人のことをいっているのである。

次に九三の爻辞について。九三の爻は乾の内卦の剛と外卦の剛の重なる接点に位置して、卦の「中」すなわち二と五の位をはずれている。上は天（九五の位）におらず、下は田（九二の位）にいないから、不安定な地位であり、だから乾乾として勉め励み、そのときそのときにしたがって戒め惕れるのである。かくて危険な地位ではあるが咎はなくてすむのである。

次に九四の爻辞について。九四の爻もまた乾の内卦の剛と外卦の剛の重なる接点に位置して、卦の「中」すなわち二と五の位をはずれている。上は九五の位の天にもおらず、下は九二の位の田にもおらず、中は九三の位の人にもいない。このように不安定な地位であるから爻辞に「或いは」といったのである。「或いは」というのは遅疑逡巡する慎重な態度をいう。遅疑逡巡して猪突盲進しないから咎を免れるのである。

次に九五の爻辞の「大人」について。いったい「大人」というのは、その徳は万物を化育する天地とひとしく、その英知は世界をくまなく照らす日月とひとしく、彼の統治は四季の循環のように秩序正しく、彼の裁きは鬼神の降す吉凶のように公平である。このような大人は、天の理法に先んずる、すなわち生れながらの英知によって行動するときには、天の理法もおのずからその行動に一致して動き、天の理法に後れる、すなわちあとから学んで得た真理によって行動するときには、天の理法の動きを至高の法則として遵奉する。彼に対しては天の理法でさえその行動とたがわないのであるから、人間や鬼神が彼の行動にたがわぬことというまでもないであろう。

おわりに上九の爻辞の「亢龍」について。「亢」という言葉は、進むことだけを知って退くことを知らず、存えることだけを知って亡びることを知らず、得ることだけを知って失うことを知らない判断の一面性をいう。まことに聖人だけであろうよ、進むことがあれば退くことがあり、存えることがあれば亡びることのある道理を悟って、正しい対処の仕方を誤らぬ者は、まことに聖人だけであろうよ。

（1）「利貞」は次の文言伝では「元亨」と合せて四徳とよび、利と貞を別々に解説しているが、ここでは易書の他の用例を参照して「貞に利し」と訓んでおく。

（2）九三は下の三画の卦の最上位にあり、不安定だからである。

（3）用九とは九すなわち陽爻を活用する秘訣の意。乾の卦は六爻ともに九であり、陽爻を典型的に代表するから特別の爻辞としてここに加えたのである。

（4）「彖」とは断すなわち断定の意で、「彖辞」とは繫辞伝四十六ページにも説明のあるように、一つの卦の象のもつ意味を全体として断定し説明する言葉をいう。彖辞はまた卦辞ともよばれ、上下経の六十四卦に加えられたこの彖辞（卦辞）の意味をそれぞれ解説するのが彖伝である。

（5）象伝とは卦の象について解説する文章の意。孔子の作といわれる。

（6）象伝は卦の全体について解説する部分と六爻の爻辞をそれぞれ解説する部分とに分れるが前者を大象といい、後者を小象という。ここまでが大象であり、つぎの「初九の爻辞に云々」以下が小象である。

（7）「文言」とは、文しく飾られた言葉の意。繫辞伝にもいうように、「乾坤の二卦は、もっとも深い真理を包蔵するもの」（五十六ページ）、「易の全体の入口をなす門」（六十三ページ）であるから、この二卦に対してだけ特にその偉大な徳を讃美する文わしい言葉が、孔子の解説として加えられているのである。

（8）九二は下の三画の卦の中央に位置するから「中」といったのである。

坤　☷☷　上下ともに坤。――受動の原理。十月の卦――

［卦辞］

占ってこの卦を得たものは、願いごと元いに亨る。ただし牝馬のような従順さを貞しくたもつことを利しとする。この卦を得た有徳者は、どこかに出かけようとするとき、先に立って歩けば道に迷い、人のあとから歩けば、頼るべき主人を得て利くゆく。陰の方角である西南[1]に往けば友人が得られ、陽の方角である東北[2]に往けば友人を失う。貞しく身をたもつことに安んじて、ふらふらしなければ吉である。

［彖伝］

この上なくすぐれているよ、坤の元いなるはたらきは。万物はこの坤の元いなるはたらきに資づいて形を生じる。とはいえ坤は天なる乾に順い、乾の元いなるはたらきを承ける。順い承けることに坤の元いなるはたらきがあるのである。

坤の徳は厚く、万物をことごとくその上に載せ、その徳は限りなく大きな乾の徳に合致し、包容力が弘大でこの上なく充実し、そのはたらきによって万物はみな滞りなく生を遂げてゆく。これが坤の「亨る」すなわち流通のはたらきである。

牝馬すなわち雌の馬は、大地の従順さと類ているが、乾のはたらきが限りなく健かであるように地上をどこまでも走行する能力をもっている。この牝馬のもつ柔順利貞の徳こそ有徳者の手本として実践すべきものである。

「先に立って歩けば道に迷う」のは、坤すなわち陰の守るべき従順の道を失うからである。あとからついてゆけば従順の道にかなって恒常的な安定を得る。「西南に往けば友人が得られる」というのは、それこそ同類とともに行動するからであり、「東北に往けば友人を失う」というのは、

いったんは孤立しても柔順の徳を守っておれば最後には慶びがあるというのである。「貞しく身をたもつことに安んじておれば吉である」というのは、それが地（坤）の限りなき徳に合致するからである。

[象伝]

大地のどっしりとしてなだらかなあり方が坤である。有徳者たるものは、この坤（大地）にのっとって、厚い徳により一切を包容してゆくのである。

[爻辞]

初六　霜を履む季節となれば、やがて堅い氷の張るときが来る。転ばぬ先の杖。

[象伝]「霜を履む」というのは、陰気がはじめて凝縮するときをいう。陰の道を伸びるがままにはびこらせれば、堅い氷になるというのである。

六二　直で方しくて大きい。学習の成果を待たなくても、万事がうまくゆく。

[象伝]　この六二の爻は陰爻が陰位にいて坤のもっとも理想的なあり方であるから、その行動は直であって方しいのである。学習の成果を待たなくても万事がうまくゆくというのは、地（坤）のあり方が本来広大ですべてを備えているからである。

六三　才能の美を内にかくして身を貞しくたもつがよい。お上の仕事に従事することがあっても、業績をあげてやろうと力まなければ終りを全うする。

[象伝]「才能の美を内にかくして身を貞しくたもつがよい――章を含みて貞にすべし」というのは、時節の到来を待って打って出よというのである。「お上の仕事に従事することがあっても」というのは、その才知が広大だからである。

六四　嚢の口を括るように、おのれの才知をかくし発言を慎しんでおれば、咎をうけることもなく、名声をもてはやされることもない。

[象伝]「嚢の口を括るように、おのれの才知をかくし発言を慎しんでおれば、咎をうけることがない――括嚢、咎無し」というのは、慎重な人生態度であれば危害を加えられることもないという意味である。

六五　黄色のスカート。大地の中庸柔順の徳のシンボル。大吉である。

[象伝]「黄色のスカート。大吉である――黄裳、元吉」というのは、文わしい徳が内面に充実しているからである。黄は大地の色、五色の中心であり、スカートは下半身を飾るもの。この爻は五位の尊貴におりながら下半身の飾りとなってへりくだった陰であるから文わしい徳が内面に充実しているといったのである。

上六　龍が原野で戦っている。傷ついて流れ出る血は天（陽）の色である玄と地（陰）の色である黄との雑った色である。

[象伝]　龍が原野で戦うのは、昇りつめて陰の道がゆき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com